



土壘内法端部配石状況



土壘内法端部配石状況

虎口西岸配石实测图



1:40

土层内法部配石实测图



IV. おわりに

城主は川村兵庫介とされ、当地では吉原殿といわれているが、本城と川村兵庫介を直接結びつけることのできる文献記録はない。文献記録のない場合は発掘調査が不可欠の要因である。そのため今回の調査成果は、本城跡解明の唯一の直接資料となるため期待されるところであった。しかし結果的には十分な資料を得るまでは至らなかった。

表面観察においては、その遺構は小規模ながらかなり良好な遺存状態である。調査は村史編纂の資料と、保存対策策定資料の収集が目的であった。従って調査も遺構の確認段階でとどめ、遺構の現状変更や破壊につながるような完掘調査まで実施することは控えた。

詰の調査においては、その普難にあたって、東より西にやや傾斜した細長い尾根状の自然地形を掘削・削平した築城過程、またその地形をもって土壘を周囲に設けるという非常に困難な作業を行っていることも把握できた。吉良城においては石積みでの詰の平場確保につとめ、中村城では石垣でもってその張り出し部の壁（切岸）^(註1)の強化をはかっている。本城においては石積みや石垣ではなく、すべて尾根部分に少量に存在する黒色土を中心^(註2)に切岸の構築をはかっている。その維持管理の困難さとともに、築造者の本城重要視の程度がうかがえる。

詰における構造物を想定させる規格性をもった遺構は検出できなかった。尾根状の僅かな場所を掘削・削平しての普難であり、規模的にも小さく、かりに構造物が存在したとしても小規模なものであろう。古井の森城跡（土佐山村）の詰は10×20m程度の平場であり、そこに2間×1間（3.6 m × 1.0 m）の小規模な礎石群を検出した。虎口部周辺の礎石にしても、移動可能な大きさの石は、近年の薪炭窯の築造に利用されたと云われている。かりに礎石が存在していてもあるいは移動消滅したかも知れない。またかりに掘立柱であったとしても、遺構は浅く小規模でかつ黒ボク状の土層での遺構検出は困難である。規模の類似で先に述べた古井の森城といまひとつの類似点は、小規模な平場を囲む30~40cm高の土壘と、土壘内法端部への一列配石状況である。いずれにしてもこの立地と規模の中世山城の詰における構築物の存否や形態については今後の調査例の増加をまって更に検討しなければならないことである。

出土遺物は1件もなく、本城の機能、廃城時期の判定はできない。ただ詰で石英粗面岩1個を表採した。石英粗面岩は北麓の吾北村周辺に所在するが、本城跡周辺に所在するものではない。^(註3)またその破損部も自然の割れでなく、人工が加えられた可能性もある。人間とのかかわりを持つらしき唯一のものである。

標高892mという山頂の小規模な山城の調査例はない。その立地から後世の擾乱も比較的少なく、遺構は比較的良好に残存しており、今後このような環境に所在する小規模な山城の研究には貴重な資料と課題を提供した。

この城は小規模ながら山城の構えは整っている。『土佐物語』のいう通りその立地とあわせ

「山々峯々手寄々々に烽火の場を定めて」 「時々刻々に相図をなし、相救ふ事、毒蛇の首尾をすが如き」 城としての性格をもった吉原城としてとらえなければなるまい。

- 註1 『吉良城跡I』 春野町教育委員会 1985. 3
- 2 『中村城跡』 中村市教育委員会 1985. 3
- 3 『古井の森城の発掘』 四国電力KK 1978. 3
- 4 同 上
- 5 川沢啓三氏（佐川高校教諭）の御教示による。



発掘調査状況

調査にたずさわった人々

今井盛義（教育長）・山崎 統（公民館長）・門脇恒次郎・高橋和宣・伊藤雅則・横山皆代・山崎敏子（以上公民館）
下本国重・川村安佐男・山村萬明・杉本依包・山崎房晴・山本莊三・山村雄作実
(以上調査協力者)